

## 学校と地域を結ぶ環境教育：クリーク地域の水環境 を素材として

加藤，仁美  
九州芸術工科大学境設計学科

<https://doi.org/10.15017/4061009>

---

出版情報：芸術工学研究. 5, pp.13-21, 2002-08-30. 九州芸術工科大学  
バージョン：  
権利関係：

---

---

# 学校と地域を結ぶ環境教育

## —クリーク地域の水環境を素材として

### Environmental Education Connecting Schools with Communities

#### A Case of Water Environment in the Creek Region

---

加藤仁美  
KATO M. Hitomi

---

---

The purpose of this study is to consider the possibility of environmental education in schools taking notice of relationship between schools and communities.

The “river festival” is a case of traditional environmental education in communities of the creek region. Children have learned how to live in the water environments through the river festival.

On the other hand there are three types of environmental education in schools from the point of view of relationship between schools and communities. Each case is concretely investigated and we see followings.

The important role in the environmental education is moving from communities to schools. But the environmental education must play some active parts in the improvement of community environments and in the renovation of community lives. Also children should be more active in future for their community environments owing to the environmental education in school.

#### 1. はじめに

地域環境から地球環境に至るまで、環境問題がクローズアップされるようになって以降、学校教育においても環境教育が取り組まれてきた。特にH.14年度から、これまでの3年間の試行期間を経て、総合的学習が本格的に実施されるのを契機に、環境教育は新たな局面を迎えている。

H.11～H.13年度の3ヶ年、建築学会農村計画分野の研究者グループは科学研究費基盤研究（A）の助成を得て、「児童・生徒の農的体験を通じた環境教育に関する研究」（代表者：神戸大学工学部重村力）という研究テーマに多様な地域と視角から取り組んできた。その一環として、筆者は、有明海沿岸のクリーク地域において、水環境をテーマとした環境教育の事例を取り上げ、環境教育が学校と地域を結ぶ架け橋となっている点に着目して調査研究を行った。つまり、学校における環境教育が体験学習というかたちで地域と結びつくことによって、かつて地域が果たしていた環境教育（川祭りに今も見られる）と同じように、子供たちが地域環境との共生の作法を学びとり、さらには衰退した地域における環境教育の機能を再生し、地域社会を生き活きとしたものに回復する契機となるのではないかという観点で研究を進めている。

そこで、学校における環境教育を学校と地域との関係性から、学校主導型、対等型、地域主導型の3つのタイプに分け、それぞれの事例をヒヤリング調査によって把握し、検討した。本稿はその研究成果の一部をまとめ、今後の展望を概観したものである。

## 2. 環境教育の動向

従来、環境に関する知識や倫理は遊びや暮らしの中で必然的に獲得されてきたものであって、教育の主体は家庭や地域社会にあったと考える。家族労働に依拠した生業の中で、子供たちもそれぞれの役割を担い、それらを果たす過程で生業やそれを取り巻く環境や生き物などについての知識や付き合い方を教わり、経験によって自習した。遊びにおいても然りである。例えばクリーク地域では、水を汚さない作法や、クリークの危険な場所は、「河童に引かれる」といって教わっていたのだ。

一次的生業が後退し、家族や地域の機能が専門分化して外化するに従い、教育機能も無論例外ではなく、環境教育も学校教育に委ねられていった。

日本における学校教育の中の環境教育は公害教育を前身としている。公害問題が簇出した1960年代の、その後半に至って始まった公害教育は、1970年代後半には環境教育にシフトしていったが、本格的な展開を見るのは文部省による環境教育推進モデル市町村指定が開始された1993年以降のことであろう。

環境教育の草創期の1980年頃はその理念や方法論が追及されたが<sup>1)</sup>、次第に実践的な環境教育が展開されていくことになった。ただし、環境教育という教科はなく、国語、社会、道徳などの時間の中で、教科内容と関連づけて行われてきた。近年では「ゆとりの時間」や、H.11年度からは、H.14年度から本格的に実施される「総合的学習」の試行時間の中で取り組まれている場合が多い。

こうしてまとまった時間が取れるようになるに従い、「体験学習」というスタイルがとられるケースが多くなっている。体験学習が即環境教育とはいえないが、福岡県の小中学校の実績では、総合的学習の中で自然体験(農業体験を含む)を実施した学校は、H.11年度には小学校では(3~6年生)190/506校;38%、中学校では76/215校;35%、H.12年度には小学校では406/501校;81%、中学校では118/210校;55%となっており、体験学習一般になると、H.12年度では実に小学校で98%、中学校で95%に上る<sup>2)</sup>。

このように学校教育の中で体験学習が重視されているのは、私達を取り巻く自然や環境はその場に身を置いて、先ず身体全体で、五感で体得するものであり、自然や環境との関わりを創出する際の初期段階における体験の重要性と感性の働きに着目しているためだと思われる。しかし、こういう体験が日常生活の中ではなく、特別の時間と空間に於いて、教育として施されるところに、むしろ

今日の尋常でない事態を読み取ることも出来る。

## 3. 「川祭り」一地域における環境教育

クリーク地域の一部において今も行われている「川祭り」は、いわば地域における伝統的な環境教育の一例といえよう。水を汚さないルールや危険な場所の認知など、毎年繰り返し行われる祭りを通して、水に対する振舞い方を、水との共生のマナーを子供たちに教えていると解釈される。

### (1) 事例1：大木町蛭池集落の川祭り

三潴地域には春水慣行というのがあり、灌漑期前の春に、早めに上流から水を回してもらい、クリークに貯留して反復利用する。クリークに水が満たされた4月の終わり頃、ワラ細工のツト、徳利、杯などを吊るした青竹を堀端に立て、水への感謝と子供達が水の事故に遭わないようにという祈りを込めて、川祭りは行われる。

夕方になると当番宿で組中の家族が揃って共飲食をする。しかし今では肝心の子供の参加は少ない。



写真1 大木町蛭池集落の「川祭り」：男達は宿の中庭でワラ細工に余念がない。その間女達はご馳走をつくる。(1989.4)



写真2 ワラ細工のツトを吊るした青竹を堀端に立てて子供達の無事を祈る

## (2) 事例2：柳川市昭代地区吉原集落の川祭り

ここでは子供が主役だ。タコを吊るした笹飾りを先頭に、子供達が行列をなして歌をうたいながら集落を一巡した後、堀に笹飾りを立て、酒や塩をまいてお参りをする。河童に引かれないように、後ろを見ないで帰る慣わしだ。笹飾りを立てる場所は、橋の袂や昔の馬洗い場など、集落の境界やよく水遊びをする所でもあるようだ。

公民館に戻ると皆でご馳走を食べる。昔は芝居などをして1日中楽しんだという。



写真3 柳川市吉原集落の「川祭り」：集落を一巡する子供達 (1993.5)



写真4 橋の袂に笹飾りを立てる

## (3) 小括

生業の中で日常的に環境学習の機会が少なくなった今日、「川祭り」に見る地域における環境教育の意義は、祭りという非日常的時間において、祭りの準備から直会（なおり：締めくくりの共飲食）に至るまでの一連のプロセスを、住居や集落といった身近な生活空間の中で見聞し、参加し、体験することによって、水に対する振舞い方や集落生活における環境共生の仕組みを修得することにある。集落をめぐって堀の様子や危険なところを知り、折りによって自然を受容する態度を学び、ともに食

べる際に大人達の話から様々な知識や知恵を伝授される。

笹飾りのワラツトに入れる小魚や酒や飾りのタコは河童の好物とみなされ、それらをお供えすることで河童をなだめようというのだ。水難を河童の悪戯と見立てる想像力は、昔話、諺のような伝承された暗喩と類似しており、地域の環境教育の豊かさは、学校教育にはないこのイマジネーションの世界にあるのかもしれない。

## 4. 小学校教育における環境教育

ここでは小学校で、川やクリーク、溜池など、水環境をテーマとした環境教育について取り上げる。対象地域は筑後川、矢部川水系の下流域にある有明海沿岸のクリーク地域である。

学校と地域との関係に着目して、小学校における環境教育のモデル的な事例を考察すると、I. 学校主導型(完結型)、II. 対等型、III. 地域主導型の3タイプがあると思われる。Iの学校主導型は学校教育のカリキュラムを主体に、地域環境をその教材として活用するもので、地域社会や地域活動との関係は比較的希薄である。IIIの地域主導型は地域に環境をテーマとした活動主体があり、学校側がその活動に参加をして実践的に環境学習をするものである。IIはそれらの中間で、学校と地域の関係が双方向的で対等なタイプである。従って、以下に各々

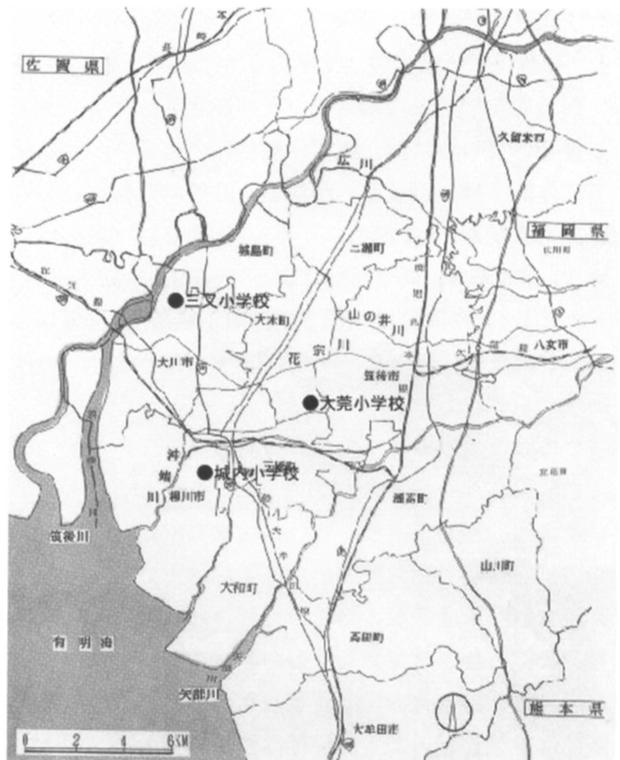


図1 クリーク地域における水環境教育の事例小学校

一事例を取り上げて考察を加えることとする。

(1) 学校主導型の事例：柳川市城内小学校<sup>3)</sup>

城内小学校は柳川の旧城内にあり、城濠に近接している。H.10年度から掘割を素材として環境教育に着手しており、H.11・12年度に柳川市が環境教育の地域指定を受け、その一環として全学的に「ほりんこ学習」に取り組んだ。「ほりんこ」とは「堀の子供」ということであろうが、個々には次のような意味が込められている。

- ほ＝本気で ⇒実践力
- り＝理性と感性を働かせて ⇒感性・思考力
- ん(の)＝能動的に ⇒表現力
- こ＝交流を広げ、深めて ⇒協同力

このように掘割体験活動を通して、「堀と共生する市民を育てる」ことが「ほりんこ学習」の目的であり、H.12年に市内の教員と父母を対象に成果の発表会を行った。3年生～6年生は総合的学習の時間 50～60h/y に、低学年は生活科の時間 40H/y に、H.12年度には次のようなテーマで実施された。

- 1年生 水と遊ぶ
- 2年生 白秋祭に参加
- 3年生 掘割探検
- 4年生 オヤニラミの観察、飼育、掘割博物館
- 5年生 ウォーターラリー、掘割の音、生き物、堀の文化について調べる
- 6年生 保護者の協力でイカダをつくり、堀に入る保護者を乗せて、掘割のガイドをする

学習のプロセスは、まず、掘割との出会いから始めて、体験Ⅰは〈感じる〉段階で、直接的な体験によって視点を設定し、「課題をつくる」、体験Ⅱは〈調べる〉段階で、情報収集、調査活動によって「課題を広げ、深め、まとめる」、体験Ⅲは〈働きかける〉段階で、「課題の解決」と成果を「伝える、表現する」、というように、段階的にプログラムされている。

こうして全学的に「掘割」を共通テーマとして取り組まれた城内小学校の環境教育は、「柳川には身近に堀という面白い素材がある」という認識を出発としており、かつてお荷物と思われていた掘割が郷土の誇りとして再認識され、環境教育の格好の教材となっている。町中が掘割で織りなされている水郷の町とまちづくりは、生きた環境教育の素材として貴重なものであり、環境教育が新たに地域とどのような関係性を構築できるかは今後の興味深い課題である。



図2 「ほりんこ学習」の骨子；研究発表資料 2000.10

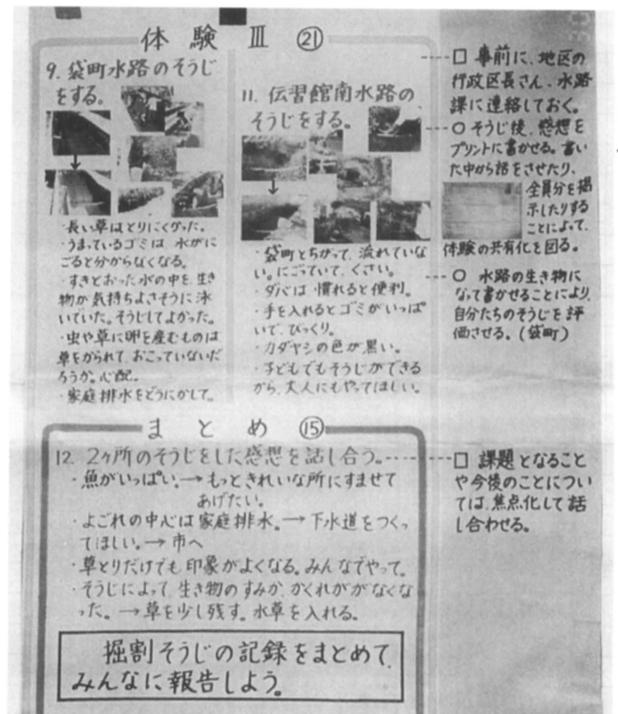


図3 城内小学校6年生の発表会のポスター(一部)

## (2) 対等型の事例：大川市三叉小学校<sup>4)</sup>

筑後川沿いの農村部に位置し、小規模小学校である。

H.6～8年度、三叉中学校を核に三校合同行事として地域環境美化に取り組んだ。三校とは三叉中、三叉小、道海島小であり、その範囲は10行政区、6公民館をカバーしている。H.9・10・11年度は作文教育から環境教育に発展したもので、国語、道徳等の教科の中で、H.12・13年度は総合的学習の中で、各学年多様な課題で環境教育に取り組んでいる。中学校はH.8年度、小学校はH.11年度に発表会を行った。

特に5年生はすでにH.5年から社会科の教科の中で、米づくりを継続している。近所の田約1反を借り、田の所有者、農協青年部や花つくりの会のボランティア、水守さんの指導と協力で、田植、草取り、稲刈り、餅つきを行っている。この他5年生はH.12年度には筑後川の上流日田市のNPO「水の森」と交流し、植林、森の手入れを行い、H.13年度には親子でクリークの浄化活動を行うなど、この間、PTAの委員会も再編成して地域への展開を試みている。

学校の展示コーナーには学年ごとの教育成果の外に、これらの環境教育をサポートする専門家の「人材マップ」が展示されており、環境教育が家庭や地域に働きかけると同時に地域社会から手厚い支援を受けていることを物語っている。

今後正規の総合的学習では3・4年は105h/y、4・5年は110h/yと時間数は大幅に増加するが、教育目標が個人の発達を主眼としているために、米づくりのような共同的活動の位置付けが困難になりはしないかとの危惧があるようだ。

## (3) 事例3 地域主導型：大木町大莞小学校<sup>5)</sup>

大莞小学校は大木町の南端のクリーク地域に位置し、10学級の小規模小学校である。H.10年度に校区内の荒牟田地区で「荒牟田ん堀ば考ゆう会」主催で行われた「掘りおこし学習会」6回に、担任教師の熱意によって4年生が環境教育の一環として参加する形となった。「荒牟田ん堀ば考ゆう会」というのは、かつて町長の諮問機関であった「おおきデザイン会議」の発展組織である「大木町グラウンドワーク準備会」の荒牟田地区支援集団であり、堀の保全事業やまちづくりに取り組むために設立された。荒牟田地区には筑後川下流土地改良事業を免れた昔ながらの姿を留める堀が残されていたため、それが対象となった。また、当時大木町では別に「掘りおこし

塾」が開催されており、筆者も招かれて参加していたため、荒牟田地区の堀干しに立ち会う機会に恵まれた。

さて、4年生の環境教育では、社会科の教科書の「低地にすむ人々の暮らし」は柳川が事例になっているので、具体的に大木町をフィールドとして学習することとし、下記のような経過を経た。

①子供達の大木町のイメージは、「田、堀、い草、ひし、ござ」など、全てクリークや水に関係することから、テーマを水、堀にすることへ誘導した。

②学校行事で矢部村杉の里に行き、矢部川上流で遊ぶ。川のきれいさ、水の違いを感じ取る。

③荒牟田の取水樋管、佐賀県千代田町直鳥のクリーク集落、神崎町クリーク公園の見学をし、柳川市で広松伝氏の話聞く。

④地元荒牟田の鳥取英記氏などから昔話を聞き、昔の打ち桶など、堀の道具の使い方などを教わる。(荒牟田公民館に道具の収集品がある)



図4 荒牟田地区の堀



写真5 大木町荒牟田の堀干し；堀干しの前に水質を調べる

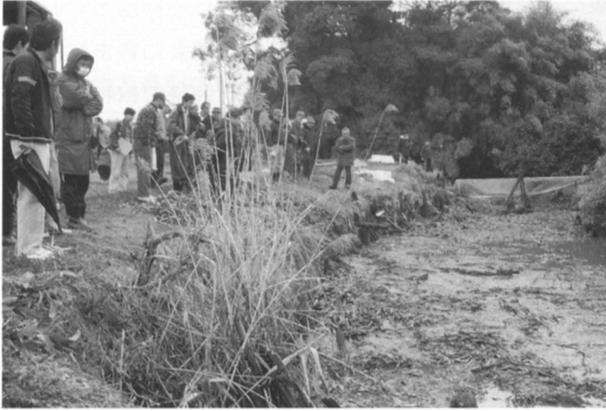


写真6 数10年放置されヘドロの堆積が著しい



写真9 おや、何かいるぞ



写真7 もはや人力では無理で、ドロ揚げにユンボが活躍



写真10 大きなフナが2匹見つけて大喜び



写真8 揚げられたヘドロの中に生き物の気配はない

⑤荒牟田地区のクリークの堀干し、ドロ揚げに参加する (H.11.2/11)。数十年のヘドロが堆積し、生き物の生息環境には程遠い堀の現状を知る。

⑥小学校の水辺公園の堀干しを実施する。底泥を花壇に揚げ、乾燥させて肥料に使用する。

⑦最後に、成果を紙芝居「水の旅物語—水まる君の大冒険」にしてまとめ、発表した。

⑧「掘りおこし学習会」の成果は、4グループ毎に「堀をどうしたいのか」、アイデアが満載のイラストに表現された。

「荒牟田堀ば考ゆう会」からは教室へ出前講義がなされるなど、学校内外で地域の指導力と協力は多大なものがあった。身近な地域環境の体験学習を通して、感性→認識→行動と子供達は高いレベルへ到達した。しかし、活動は翌年以降学校と地域の何れにおいても継続しなかった。子供達には日・祭日の行事参加は多少負担になったようだ。他方、地域では堀の水をきれいにするには流れることが不可欠であり、堀の水流を取り戻そうという発想から、課題が他地域へと拡大し、地域で問題解決が完結しない方向へと拡散していった。活動を持続することの困難さと大切さを実感する結果となった。

しかし、大木町自体は堀に対して積極的な姿勢を示している自治体の1つであり、地域活動の支援対策が図られることが期待され、他方大莞小学校では、H.14年度から始まる総合的学習には4年生のテーマに「堀」と「水」が再び予定されており、新たな展開が期待されている。

表1 掘りおこし学習会の「どのような堀を望むか」

環境	水質	昔のようにきれいな水に 水質浄化装置の設置/ゴミの除去 モニタリングを行いデータを公開 水の流れ
	野生生物	自然を豊かに/生物を多様に ホタルのすむ堀/メダカのすむ堀 野鳥のすめる環境 ヨシ・マコモなどの密生地
	生息環境	コンクリート護岸 → 土の護岸
施設	安全	階段を設置して落ちても上がれるように
	体験・学習	デイキャンプ場のような学習広場 クリーク公園のような整備 昔の農家の生活体験できる施設
	観水	テラス/デッキ/橋
堀との関わり	生活	生活に密着し、とけ込んだ堀
	維持管理	堀干し/当番/堀干しの見直し/計画的ゴミ上げ 泥を堆肥に 楽しみながらモデルづくりをし、町民に伝える 堀の機能形態の復元・維持
	遊び	カヌー/魚取り/水辺に近づき易く 水泳/堀の周りの散歩道/子供達の遊び場

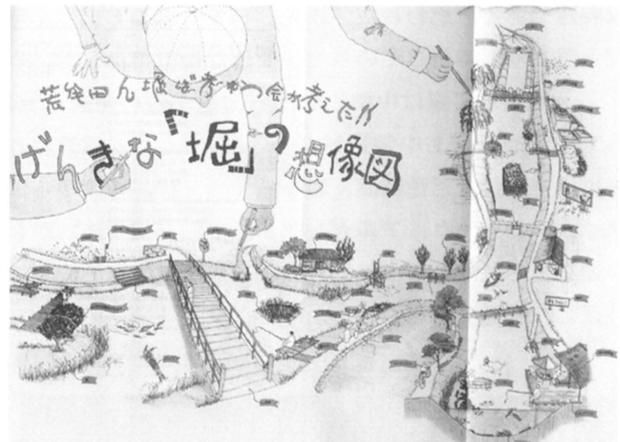


図6 掘りおこし学習会の「げんきな堀の想像図」

表2 「どんなものが欲しいか」

	目的	復元タイプ	公園タイプ	浄化タイプ	農業タイプ
環境	生きもの	・魚類・植物の飼育・復元 ・ヤナギ等の植栽			
	その他	・土の土手	・花壇 ・島		
施設	観水	・馬場場の復元	・階段 ・デッキ ・水上テラス ・足洗い場 ・憩いの場 ・ボート小屋		
	農業・漁業	・川のそばで魚を育てる ・水車 ・おが・たけのこ等の産物		・堀のそばに水車 ・魚を育てる	・農業用水施設
	学習施設		・資料館 ・学習館 ・おがの博物館 ・遊歩道		
	娯楽・遊び		・橋 ・公園 ・キャンプ場 ・テーブルを敷くし、橋をたどる		
	その他の施設			・浄化施設 ・誰でも自由に上がることができる ・おがの土を埋め戻す	・堀干しの設備 ・橋
堀との関わり	維持管理	・堀干しの実施		・おがを育てておがを埋め戻す	
	その他	・堀の料理再現			

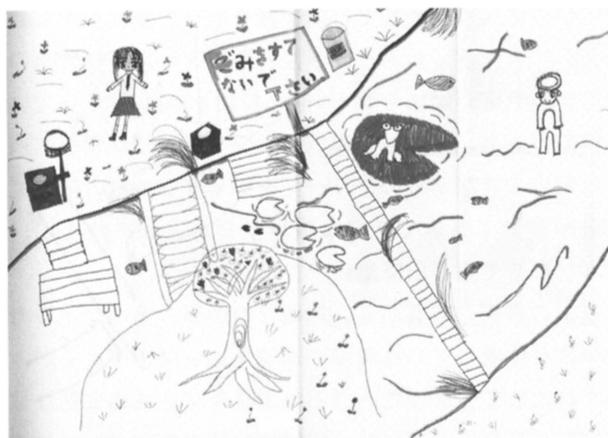


図5 掘りおこし学習会の「こんな堀がいい」

(4) 小括

柳川市はクリークの浄化とアメニティの創出に早くから取り組んできた先進地であり、環境教育にとって身近な優れた教材に恵まれている。城内小学校の事例がI学校主導型とはいえ、環境教育が地域へインパクトを与えているというよりも、これまで地域が蓄積してきたストックを全面的に利用して環境と共生する知恵を学んでいるのである。III地域主導型の大栄小学校では地域の強力な活動に牽引されたが、それが持続的なものになるには学校と地域の双方に持続的なサポート体制が必要であることを示唆している。この点では、II対等型の三叉小学校の米づくり学習が永年継続している事例に学ぶところがあるのではないと思われる。

5. 国際的視野から見た環境教育—世界湖沼会議から

(1) こども湖沼会議

昨2001年11月琵琶湖において第9回世界湖沼会議が開催された。1984年に第1回会議を琵琶湖で開いて以来、世界各地をめぐる、今回里帰り開催となった。

クリークは水路と溜池の機能を併せ持った水空間であるため、湖沼と類似した性格がある。中国江南地域や霞ヶ浦のように大きな湖沼の周辺に掘割が分布する環境も少なくない。

今回は環境教育が一分科会を占め、国際的な観点からもますますその重要性が認識されていることを物語っている。環境教育の主な内容は水質改善に関する科学的アプローチからプログラムや教材の課題、表現活動に至るまで多岐にわたり、今日の環境教育の状況は国際的なレベルでも類似している印象であった。その中で地域性に深化していく際のコミュニケーションの困難さが普遍的

な課題であると思われた。また、日本からの参加が琵琶湖と霞ヶ浦に特化しているのが顕著な特徴であった。

こども湖沼会議は中学生による環境学習の発表・討論会で、司会・進行も中学生が担った。日本からは滋賀教育大付属中学校など琵琶湖、霞ヶ浦から三校、外国からはタイ、デンマーク、アルゼンチン、中国（杭州市）から参加し、それぞれ学内外で取り組んだ環境学習の成果を披露し、意見交換を行った。



写真 11 こども湖沼会議（大津市 2001.11）



写真 12 世界湖沼会議ポスターセッション

## (2) 小括

こどもを主体とした学校間の交流の機会としても、このような試みは国内でももっと取り組まれて良いと思われる。環境教育の成果の発表や情報交換・意見交換の場として、こどもが主役の学校間の交流が国際的視野のなかで展開することが望まれる。

## 6. さいごに一学校と地域をつなぐ環境教育

環境教育が地域から学校へその主体を移行したとはいえ、地域との関係性の創出は必然である。何故なら、教育の対象となる環境は地域に存在し、地域を熟知している達人は地域住民の中にいるからである。従って、環境教育が学校と地域をつなぐ新しい結び目となって、地域環境の再生や地域生活の活性化の契機となることが期待される場所である。

本研究で得られた知見は次のようにまとめられる。

(1)かつて地域や家庭で行われていた環境教育は自然の恵みに依拠した生業や生活の中で、体験的に身に付けるものであった。生活の変化や地域における教育力の低下によって希薄になったものの、今日クリーク地域で行われている「川祭り」の中に伝統的な地域の環境教育の姿を再確認することが出来る。

(2)「川祭り」はクリークに水が満たされた頃、ワラ細工を吊るした笹飾りを堀に立てて、水の恵みに感謝し、子供たちが水難事故に遭遇しないように祈る祭りであるが、このような行事を通して水に対する振舞い方や環境共生の生活のあり方を体験的に習得する。生業や遊びを通して地域で環境について学ぶ機会が少なくなった今日、地域における環境教育の一端を見ることが出来る。

(3)ここでは学校での環境教育のあり方を学校と地域との関係性から、学校主導型、対等型、地域主導型の3タイプに分け、事例を通して検討した。学校主導型の城内小学校では街中に保全されている掘割を貴重な教材として環境教育に全学的に取り組んでいる。今のところ地域から学ぶという学校完結型で、地域への直接的な働きかけは見られないが、目に見えない影響はあると推測される。対等型の三叉小学校は農村部に位置しており、予めから地域の支援を受けて田圃を借りて米作りを体験学習してきた蓄積があり、学校と地域との良好な関係の中で環境教育が進められている。特にPTAが果たしている役割が大きい。地域主導型の大茱小学校では集落に残されている昔ながらのクリークを保全する地域の活動に学級が参加する形で活発な環境学習が実践されたが、様々な事情で翌年以降継続できなかった。

以上の事例の考察から、地域との関係の多様なあり方は学校が位置している環境や地域性にも関連があるが、いずれにしても学校における環境教育は地域の支援なしにはありえない。それ故、持続的な環境教育が行われるに当たっては、無理のないプログラムと支援体制が不可欠だと思われる。

(4)学校における環境教育へのもう一つの期待は少し息の長い将来のことである。教育は本来人づくりであるという基本に立って、環境教育を受けてきた子供達が大人になって地域社会で活躍する時、地域環境に対する自覚的な行動によって、地域における教育力の回復に寄与するに違いないという点にある。

なお、本調査研究にあたって福岡県教育委員会及び当該各小学校、関係者に資料の提供と聞き取り調査の協力を得た。記して感謝します。

### 註および文献

#### 1) 例えば

・都留重人「環境教育 何が規範か」岩波書店、1982

・沼田真「環境教育の方法に関する研究」1980

近年は教育技術や体験教育のノウハウものが多い。

#### 2) ヒヤリング：福岡県教育委員会

#### 3) ヒヤリング：N 校長先生、Y 先生

・「発表会用研究の概要パンフレット」柳川市立城内小学校、H.12.10

・平成 11～12 年度発表会資料「水との共生を目指す環境教育」H.13.2

柳川市教育委員会他

#### 4) ヒヤリング：F 校長先生、教頭先生

・三叉小学校カリキュラム、H.12 年度

#### 5) ヒヤリング：T 校長先生、M 先生

・「掘りおこし学習会報告書」、荒牟田の堀ば考ゆう会、生態計画工房

H.11.4

・『『水の旅物語』をつくろう～なぜなに堀の不思議～』の実践、4 年 1

組担任 M 先生